

『改訂版 ON! 2』で基礎を生かして より自由に音楽と遊ぶ

ONTOMO高校 音友キョウカ先生の日々



『改訂版 ON! 2』は、「音楽を形づくる要素」について「どの要素をどのように効かせると、自分が目指す表現ができるようになるか」を学び、自発的に考えて工夫できるようになることを目指します。『ON!』を使った授業の例として、音友先生の挑戦をご覧ください。

4月 2回目の春、より深い学びへの第一歩!

—4月。このクラスの生徒たちとの学びも2年目に突入する。昨年学んだことをより生かしていきたいキョウカ先生。「2年生はパートを増やして豪華なアンサンブルに挑戦させよう！」

—まずは「上を向いて歩こう」を歌って。有名な曲だからスウィングの感じはわかるみたいだけど、なんとなくじゃなく意図をもって表現してほしいな。「この曲をどんなふうに歌いたいですか？ そのためには何をどうすればよいだろう？」

「歌詞も見せてみよう。坂本九さんはどんな風に歌ってる？」

—どう表現したいか、イメージが具体的にになってきたみたい。ここでいよいよアンサンブルに挑戦!

「イメージを表現できるのは、メロディーの歌い方だけじゃありません。音を加える、という方法もあります」

リズム・パートと対旋律パートとハーモニー・パートを加える。各パートは易しいから意外と時間がかからずにできるはず!

表現の手がかりとなる音楽用語も、クイズ形式で覚えてしまおう

音楽用語	意味
① tempo (テンポ)	演奏の速さ
② dynamics (ダイナミクス)	演奏の強弱
③ articulation (アーティキュレーション)	演奏の滑らかさ
④ phrasing (フレーズ)	演奏の区切り
⑤ harmony (ハーモニー)	和音
⑥ melody (メロディー)	メロディ
⑦ rhythm (リズム)	リズム
⑧ counterpoint (対旋律)	対旋律
⑨ accompaniment (伴奏)	伴奏
⑩ ensemble (アンサンブル)	アンサンブル

「合わせてみよう! これらに加わるのと加わらないのではどう違うかな?」
—リズム、カノン風対旋律、ハーモニーを加えて、これらの効果について理解させることができたし、歌唱の表現もより深まった!

キョウカ先生は2年目も良いスタートをきることができた!

ONGAKUをふかめよう
「4.音楽を表現するために」(p.7)

—梅雨。外で思いっきり活動できる日も少なく、何となくモヤモヤ、イライラしがちな生徒たち(とキョウカ先生)。「うーん。これはよくない傾向!」キョウカ先生はこのゆき場のないエネルギーを合唱にぶつけることにした。

ヴォーカル・アンサンブルの楽しみ
 4声部
Canone perpetuo
 ヨハン・セバスティアン・バッハ
 ジョアキーン・ロシーニ 作曲

「まずは短い輪唱でウォーミング・アップしましょう。お互いの声をよく聴いてね〜」

—「上を向いて歩こう」のアンサンブルの成果もあって、カノンの効果、おもしろさを少しは理解しながら歌えているかな?

動物の鳴きまねで盛り上がり……



- ♪ どじょっこ ふなっこ (短い混声4部)
- ♪ In the Mood (ヴォーカル・アンサンブル)
- ♪ 殖生の宿 (混声4部)
- ♪ 学生歌 (男声4部・女声3部)
- ♪ うたを うたう とき (混声4部)
- ♪ Ave verum corpus (混声4部)
- ♪ かわいい恋人がほほえんで (混声4部)
- ♪ The Scat Calypso (混声4部+ボディ・パーカッション)

「次は合唱。この曲はじっくり取り組んで、2学期の文化祭で発表するよ!」

今の彼らに合っているのはどの曲かな。生徒たちの意見も取り入れて決めよう。

『天使にラブソングを2』のゴスペルもいいかも

Joyful, Joyful
 ジョイフル・ジョイフル
 ヨハン・セバスティアン・バッハ

— そうだ、「Joyful, Joyful」といえば……声の力強さを実感できる作品「第九」も鑑賞しよう!
 「みんなで声を合わせた時のパワーってすごいよね」

ON! の輪唱

『ON!』には輪唱(カノン)を多数掲載しています。輪唱は、パートごとの音とりの時間を短縮し、音を重ねることの楽しさを簡単に味わうことができます。

〈輪唱に関わる掲載曲〉

『改訂版 ON! 1』

- Viva la musica ● Dona nobis pacem
- Football Canon (ヴォイス・アンサンブル)

『改訂版 ON! 2』

- Canone perpetuo
- 「7つのやさしいカノン」から(器楽)
- 上を向いて歩こう(「ふかめよう」より)
- つくろう(第九の旋律で輪唱を創作)

交響曲 第9番 二短調 作品125
「合唱付き」
 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
 Ludwig van Beethoven (1770-1827) / ドイツ

Point

- ベートーヴェンの生涯と音楽とのかかりについて、当時の社会状況や文化的背景をとりあえて考えてみよう。
- 交響曲のフィナーレに声楽を取り入れたことによって、どのような効果が生み出されているのかを話し合ってみよう。

● 楽曲について

4楽章からなるこの曲の終楽章では、シラーの詩「歓喜に寄す」による独唱・重唱・合唱が用いられており、交響曲に初めて声楽を用いた曲として、後世に大きな影響を与えた。

この日では、第1楽章から第3楽章までの独立した楽想が、第4楽章の冒頭部分においてそれぞれ回想され、人類の理想を高らかに歌い上げた「歓喜」の旋律に導かれていくというドラマチックな音楽の展開がなされている。

第1楽章 ソナタ形式
 第1主題
Allegro ma non troppo e un poco maestoso ♩=118
 (トランペット)

第2楽章 スケルツォ(3楽章目)
 主題
Molto vivace ♩=118
 PP(ヴォイオリン3)

第3楽章 王冠と後奏
 主題
Adagio molto e cantabile ♩=68
 mezzo soprano (ヴォイオリン1)

第4楽章 歓喜の1楽章
Allegro assai ♩=80
 P(トランペット、コントラバス)

第4楽章 合唱1楽章
Allegro assai vivace ♩=84
 (ソプラノ) alla Marcia
 (アルト) Marcia, schillerend. Gekr. - - - - -
 (テナー) Marcia, schillerend. Gekr. - - - - -
 (バス)

● ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン ●
 ベートーヴェンは、古典音楽の大成者であるとともに、ロマン派音楽の先駆者であるとして知られている。交響曲、弦楽四重奏曲、ピアノソナタなどの名作の数々は、人々に深い感動を与えているが、その数曲には「苦悩を乗り越えたところに歓喜あり」という人間的輝きが溢々とあふれている。

キョウカ先生と生徒たちは声の力を実感し、梅雨のゆううつを吹き飛ばした!

—また、あっという間に1年が過ぎようとしていた……。
「独唱発表会でしめくくりましょう。昨年度より豊かな表現ができるようになってるかな？」

3. 言葉と歌

体験しよう
●詩と旋律の関係を理解する。
●言葉の発音に注意して歌う。

STEP 1 日本語詞を美しく歌う方法を考えよう

「からたちの花」(→p.32)を例に、日本語の歌詞を美しく歌う方法を考えよう。

●「白い花が咲いたよ」という歌詞を、声に出してゆっくりと読んでみよう。
「しろい しろい はなが さいたよ」

●抑揚やアクセントに着目して読んでみよう。すると、例1の旋律の音の動きと似てくるはずだ。

●山田耕筰は、調律2のようなリズムで作曲している。「はな」のニュアンスが強調されていることわかる。

●楽譜にはさらに、デスート、スラー、クレッシェンド、アクセント、強弱記号、そして速度の変化が書き込まれている(例3)。

☆ニュアンスを生かしながら「からたちの花」全曲を歌ってみよう。

●子音や母音の発音について考えてみよう。

①例3の中で、特に気をつけたい子音について考えてみよう。
●[s] (例:「しろい」の「し」の[s])や、[h] (例:「はな」の「は」の[h])のような子音は、早めに準備して、少し時間をかけて発音すると、歌詞の言葉が聞きやすくなる。
●「はなが」の「が」の[g]のような摩擦音(喉に接して発音する行音)に気をつけよう。

②母音の発音も考えてみよう。

●歌詞に記したニュアンスの違いによって、母音の響きも微妙に変化する。
例えば、「はな」と歌う時、どんな花をイメージしているだろうか。「さいた」と歌う時、花の咲くことのうれしさ、喜ばしさなど、どんな気持ちを込めているだろうか。それによって、表情や口の開き方、口の形のほかに変化はないだろうか。歌詞に記したニュアンスや、それをどのように表現したらよいかを考えよう。

●「やしかったよ」の「し」(p.33の2頁目4小節)で、母音「i」を強調しすぎると不自然になる。さまざまな歌手の演奏などを参考に、自然な発音を心がけよう。

☆子音や母音の発音に留意しながら、「からたちの花」を歌ってみよう。

STEP 2 外国語の発音を考えよう

ドイツ語の歌詞の場合を例に挙げてみる。
ます [A] のように、母音のみで歌ってみよう。
次に、[B] を確認し、母音の前後にどんな子音がついているか気をつけながら発音して、歌ってみよう。日本語の発音では基本的に、母音のあとに子音がつくことはないの、しっかりと発音できるようにしよう。
[Frohler] の「r」のような二重子音も明確に歌おう。

ONGAKUをふかめよう「3.言葉と歌」(p.6)

「良い声、正確な音程、そして、どのような歌い方をするかも大事ね。さまざまな発声練習をやってみましょう」

レガート、スタッカート、子音、母音、音域……既存の曲を使って発声練習！

—これまで学んだことを総動員し、昨年より具体的な工夫を積み重ねてより深い表現をめざす生徒たち。キョウカ先生は練習の段階からすでに胸がいっぱいだったが、発表会本番で生徒たちの一生懸命歌う姿を見てついに涙……。



「言葉のもつリズムと抑揚が歌の中に生かされていることは去年学んだね。今年はより表現を深めてみよう。
作曲者がより大事に歌ってほしいと感じたところは、音の高さ、長さ、強弱が工夫されているのわかるかな？」

—みんな真剣に楽譜を見てる。楽譜に作曲者の思いが込められていることに、改めて気づいてくれたみたい。
「そして、美しい言葉で歌うために、子音、母音の発音も一つ一つ注意深く表現していこう。外国曲の場合はどうかかな？」

教科書に載っている具体的な例を試しながら……

2. 豊かな声を目指して

体験しよう
●既存の曲のフレーズを使い、発声練習を工夫して行う。
●発声練習をし、歌うための声をつくる。

STEP 1 曲のワン・フレーズを使って発声練習をしよう

教科書に掲載されている曲を歌って、思うように声が出ないと感じることはないだろうか。その曲のフレーズを使った発声練習に挑戦してみよう。

●「Una furtiva lagrima (人知れぬ涙)」(→p.20)を使った、レガートで歌う発声練習の例。

●最初の音を美しく響かせ、少し長めに伸ばして歌おう。
●「Una」の5度の音程を意識しながら、下行音型をスムーズに歌おう。
●母音のみ取り出して歌うのも、よい練習になる。
●歌詞の読誦をし、そのトーンを少しずつ上げながら繰り返していく練習も効果的である。

●「Die Forelle (ます)」(→p.28)を使った、スタッカートで歌う発声練習の例。

●例2を、「ha」のほか、「hi」「hu」「he」「ho」でも歌おう。
●音の響きが安定するよう歌おう。
●半音ずつ上げていたり、下げたりして、調を転調してみよう。
●例3の楽譜を、1小節遅れの2声の輪読で歌ってみよう。「ha」「hi」「hu」「he」「ho」などの言葉で歌うとよい。

STEP 2 音程を正確に取りながら発声練習をしよう

●「La serenata」(→p.22)の「Vola, O serenata!」、「Vergin, tutto amor」(→p.25)の「Vergin, tutto amor」というフレーズを使って、4度の上行や下行の音程を正しくとらえながら、発声練習をしよう。
●「恋歌」(→p.36)の「妙山の妙に」、「鐘」(→p.38)の「見知らぬ人」というフレーズを使って、6度の音程や、織り合う音への正確な移動を意識しながら発声練習をしよう。

ONGAKUをふかめよう「2.豊かな声を目指して」(p.5)

キョウカ先生は、生徒たちに「音楽を楽しみ、音楽と遊ぶ力」を身につけさせることができました！

そして音楽Ⅲへ！

音楽之友社の「音楽Ⅲ」教科書は、「高校生の音楽」内容解説資料をご覧ください。

教科書の掲載曲一覧は、音楽之友社HPをご覧ください。